



故郷の空 No.26

この夏、二十年間住んだ東京都心の家を売却して、小平市という郊外に引っ越しをした。郊外といっても、電車に乗れば都心は近く、かろうじて武蔵野の面影が残る所だ。

今度の家は平屋の古い日本家屋である。縁側や雪見障子もあって風情はあるが、それだけにあまり機能的とはいえない。畳での生活も二十年振りで、腰や膝が痛くなったりして、引っ越してすぐ建て替えを考えたりした。

それでもこの頃は、最小限の手直しをしながら、このままここに住んでみようという気になっていた。住めば都ということもあるだろう。しかし理由はもつと別にある。外から戻って着替える時、朝、目を覚まして障子を開けた時、なぜか故郷の家に戻っているような心地よい錯覚を起こすからである。また、子どもの頃の、遊んだり昼寝をしたりした縁側の記憶が蘇ってくるような懐かしい錯覚もある。

最初、便利な都心から離れることは心残りだったが、今はこの引っ越し先で故郷に出会ったような、そんな気分浸っている。

(彫刻家)

むらかみ・たもつ モダンアート協会会員。一九五〇年、大洲市生まれ。東京都在住。東京学芸大学卒。モダンアート展や鹿島彫刻コンクールなどで受賞。東京、英国ほかで個展。蔵王高原、三重・尾鷲市、東京・神田などに彫刻作品設置。二〇〇〇〜〇一年、文化庁派遣芸術家としてロンドン滞在。秋には大洲・山荘画廊で四年ぶりにきりがみ原画展開催。

引っ越し

村上 保

Tamotsu Murakami